

野外博物館における学びの可能性について

—その理解の整理をもとに—

大瀧 拓実*

はじめに

博物館の形態の一つである「野外博物館」は、現状国内での明確な定義はない。日本の野外博物館は新井重三によって体系化、分類がなされた(新井 1956)。しかし、それ以降の野外博物館に関する研究の中では、一方の研究者が野外博物館として紹介している館が、一方の研究者は名称すら出していないということが多々ある。これは野外博物館が研究者によって別々の定義がされている、つまり野外博物館像が異なっていることが原因として挙げられる。

ヨーロッパでは野外博物館(open-air museum)というものは明確に定義されている。ヨーロッパ野外博物館協会(Association of European Open Air Museum)のチェアマンであったClaus Ahernsはその著書で野外博物館を明確に文化史博物館であるとしているが、新井はこれを引用しながらも、文化史のみを扱うのではなく自然科学系も受け入れるべきとしたのである。これにより体系づけられた分類は国内での野外博物館の基礎となるわけだが、筆者は逆にその分類が野外博物館という存在を言及する際に、明確にどういったものか説明することを難しくしていると考ええる。そもそも博物館全体として館種の分類をする際には、扱う資料を基準に分類している。新井もこれに則り野外博物館を扱う資料をメインにして分類を行った。その結果、自

然科学系分野の野外博物館に動物園や水族館、植物園が分類されることとなった。これら施設は博物館ではあるが、野外博物館として一つの括りに入ると違和感がある。たしかに動物園の展示資料は生きている動物であり、本来生息している所から移動つまり収集しているが、野外博物館として位置づけるには少々根拠が乏しいと判断する。一言で野外博物館と言っても、受け手からすると様々な野外博物館像があるため、本稿で言及する野外博物館とは、建造物を移築・復元し博物館組織の中で管理されている形態のものを指す。そのため、現地保存型の野外博物館とされるもの、遺跡や重要伝統的建造物群などは対象にしていない。これは博物館と名前が付けられている以上、博物館組織の手で建造物が収集され、保存管理されていることが妥当であると考えたからである。

本稿ではこうした野外博物館がどのように国内で広がりを見せ、普及していったのかを整理し、その後の研究において野外博物館ではどのような教育や学びの実践がなされているのか、今後の可能性も含めて論述するものである。

1 北欧における野外博物館の誕生

野外博物館の歴史を語る上で、世界で最初の野外博物館であるスカンセンについて言及せざるを得ない。スウェーデンの首都ストック

* 明治大学大学院文学研究科臨床人間学専攻博士前期課程

クホルムにあるスカンセン (Skansen) は1891年に国語学者のアルトゥール・ハゼリウス (Artur Immanuel Hazerius) の手によって開園した。ハゼリウスは、幼い頃より軍人の父から愛国教育を施され、ウプサラの大学で言語学を修めた後にスウェーデン語の学者となった。このことからハゼリウスは非常に愛国心の強い人物であったことが推察できる。

一方で、スカンセンが誕生した19世紀のスウェーデンでは近隣の北欧諸国、つまりデンマークやノルウェーと共に、強大な西洋列強に対抗するための「汎スカンジナビア主義」を掲げていた。15世紀にデンマークの支配下から独立し、以降幾度も旧宗主国との戦いを繰り返していたスウェーデンが、北欧というまとまりで西洋諸国に対抗するという戦略をとったことから当時の列強の勢いが非常に盛んであったことが分かる。

スウェーデン国内では、産業化に伴う生活の変化により農民人口が減少し、都市に流入した。その都市部では人口が増加したことで日雇いなどの契約労働者が増加していった。国内での稼ぎが見込めないと判断した人々の一部は国外へ出稼ぎ労働者として移住した。これにより国内全体で人口が減少傾向になり、それまでの伝統的な農村文化が変容しつつあった。

これらから、19世紀のスウェーデンは国内外で大きな変化があった時期であったことが分かる。西洋列強に侵略されないよう強固な国政を保つことと、海外への人口流出の両者を食い止めるためにはスウェーデン国民としてのアイデンティティを醸成することが打開策の一つであったと言えるだろう。

ハゼリウスはこうした状況を自身の目で見て回った。1872年にダーラナ地方を旅行し、スウェーデンにおける伝統的な農村社会が消失しつつある困難な状況に陥っていることを確認した。そこで、伝統的農業文化を保存し、後世に残していくために衣服や家具など生活

史を物語る資料を収集し、自身の借家で公開するという行動に出た。このコレクションは後に、ドロットニングガータンの二つの展示場に移され、1873年10月24日にはThe Scandinavian Ethnographic Collectionとして展示公開された。この展示場は現在の北方民族博物館 (Nordiska Museet) である。

ハゼリウスは1878年の第3回パリ万国博覧会でスウェーデン農民の暮らしを人形やコスチュームスタッフを用いて紹介する展示を行った。このリアリティのある生活を展示するというアイデアはスカンセンに取り入れられることになる。1880年にコレクションが増加したドロットニングガータンの展示場は改組され、北方民族学博物館という名称に変更された。

パリ万博でのアイデアとコレクションの増加によって、ハゼリウスは民俗学と歴史を組み合わせた屋外での展示構想の着想を得ることになった。そして1891年ストックホルムのジュールゴーデン島に屋外展示をする博物館としてスカンセンが開園した。

スカンセンの開園背景を見るに、生活史を在りし日の姿のままに展示するという方法は、その文化や伝統が消失の危機を迎えるまで行動に移されなかったと言えるだろう。

2 日本における野外博物館の誕生

日本で最初の野外博物館は1956年開館の大阪府豊中市にある日本民家集落博物館とされる。その背景には高度経済成長による宅地開発に伴う急速な自然環境の都市化があった。それに伴い、失われつつある伝統文化を保護するという目的が生まれた。構想当初は、白川郷の合掌造り集落の一軒が移設される予定であったという。

このことから日本での野外博物館誕生の契機には、失われつつある建築物を保存する目的があり、その後に開館する博物館明治村 (1965年) や川崎市立日本民家園 (1967年)

なども同様の流れを汲むことになる。

これらの流れを見ると、日本での野外博物館誕生の背景はスウェーデンのスカンセン誕生の背景と類似点が多い。日本ではそれ以前から澁澤敬三らによる野外博物館構想は存在していたが、実際に形として誕生するには至っていない。しっかりと形になったのは戦後であり、その背景には文化財保存の意識があった。野外博物館は伝統文化保存意識がその根底理念にあり、保存意識はその地域への愛着、つまり郷土意識であると言える。

このことから、野外博物館には郷土意識が根底にあり、最重要な存在理念となっていると言える。

3 日本における野外博物館研究

先述のように誕生した野外博物館は、国内でさらに広まっていった。その研究としては新井が野外博物館を体系付ける以前から行われていた。日本で最初に「野外博物館」という語が使用されたのは1949年に出版された『新しい博物館』の第10章における木場一夫の記述である。

一方で落合知子は野外博物館という語を最初に使用したのは南方熊楠であるとしている。南方は神社祭祀反対運動を引率し、その活動中であった1912年に白井光太郎に宛てた書簡で野外博物館という語を使用した。南方は神池神林が天然記念物を多く保存している点から野外博物館と見なせるとしている。このことから落合は、野外博物館の語の使用は南方が最初であり、日本における最初の野外博物館は南方がそう見なした神社の社叢であると主張している。

日本での野外博物館研究はその定義や淵源を探るものが多い。そのため、次章ではもう少し踏み込んで、野外博物館での教育及び学びに関してどのような議論があるのかを整理したい。

4 野外博物館における教育と学びの特徴

野外博物館ではどのような教育及び学びの特徴があるのかという問題があるが、これを説明するには博物館全体でどのような教育と学びに関する理論が存在するのかを整理しなければならない。そこで、博物館教育に関する代表的な研究であるジョージ・ハイン (George.E.Hein) の『Learning in the Museum (博物館で学ぶ)』を取り上げ、これをもとに検討をおこなうこととする。

ハインは一つの教育理論には二つの理論、つまり知識に関する理論と学習に関する理論、一つの実践理論が必要であるとした。そのうち、知識に関する理論について、人間の知識とは人間の存在の外側に事実として存在するという「实在論」と、人間が社会的な影響を受けながら内面において個人的に知識を構成する「観念論」の両極があるとする。学習に関する理論については、知識は受動的に付与されるべきであるという考え方と、学習者自身が能動的に知識を構成するべきであるという考え方の両極があると述べている。これら両極を持った理論を組み合わせることで教育は大きく4つの領域に分けられ、博物館側はどの教育論の立場を取るかでその展示方法が決定するとした。(ハイン 2010 pp.26-62)

その1つ目は「解説的教育論」である。实在論の立場で受動的に学習するという考えの理論であり、この立場の展示の特徴として、始まりと終わりがはっきりとしており意図されたストーリーに沿っている点がある。また、資料に関する学問的情報を、簡単な内容から難しい内容へと階層的に解説するキャプションがあるという特徴もある。問題点としては教示的なものになってしまい、思考が偏るおそれが生じる。また、開館から歴史が長い博物館に多い傾向にあり、一度建ててしまうと展示の仕組みを後から変更することが難しいことが、展示の変化を加えることを阻害していると考えられる。

2つ目は「刺激反応理論」である。観念論の立場で受動的に学習するという考えの理論であり、基本的には解説的教育論に基づく展示と大きな変化はない。特徴としては博物館側が望む反応に褒美を与える仕掛けがある点である。例として、科学館などで見られる問題形式の展示で正解のボタンを押すと音が鳴る仕掛けのようなものである。

3つ目は「発見学習論」である。実在論の立場で能動的に学習するという考えの理論であり、ハンズオン展示と同様に扱われることが多い。

しかし、これには大きな問題点があるという。それは発見学習論に基づいた展示は一見すると来館者が能動的に知識を構築しているように見えるが、実際は他者つまり博物館側によって決められた結論に誘導されているという点だ。これでは“発見”にならないが、学習者に一任すると教育者側の求める答えにたどり着かない可能性があるために仕方のないことであるという。たしかに、戦争や差別問題などセンシティブなテーマを扱った展示において博物館側が想定していた結論とは真逆な方向へと来館者の結論が着地してしまうと館の責任問題につながりかねない。博物館が意図していない答えを導き出すのは好ましくないのである。

しかし、最後の理論はそれをより強化させるものであると見なせるだろう。それが4つ目の「構成主義」である。観念論の立場で能動的に学習するという考えの理論であるが、現状ではこの教育理論に基づいた展示方法を採用する博物館はない。それはこの理論が博物館の性質上相容れない点が含まれているからである。

構成主義に基づく展示の理論上の特徴は、展示のどこから見始めてもよく、決められた順路が存在しないというものがある。これは来館者に様々な能動的学習様式を提供し、様々な資料の見方を提示するという考え方に

よるものである。しかし実際の所、博物館というのは学芸員が何かしらの政治的な意図をもって展示設計をしていることから、博物館の性質上構成主義に基づいた展示はそれ自体が存在することが厳しいと言える。

発見学習論の問題点でもあったように、博物館側が想定していない結論にたどり着きやすいということだけでなく、そもそも展示の始まりが設定されていないということは博物館側の伝えたいメッセージすらその展示からは読み取れないということになる。これは来館者が自由に解釈できると言えば聞こえは良いが、実際は博物館側が徹頭徹尾展示に対する責任を放棄しているという意味である。

だが一方で、実現可能な特徴も有している。それは、来館者が自分自身の人生経験を活用しながら様々な活動や体験を通して、展示資料と自身の考え方を結び付けるという点だ。屋内展示型の博物館では、資料はガラスケースや壁面に展示されており、多くの場合手で触れることはできない。だが例として、昭和の生活をテーマに当時の玩具が展示されていた場合、来館者の中には幼少期にそれで遊んだことがある人がいる可能性がある。彼らにとってそれは思い出を呼び起こすものであり、実際に手にすることで当時よりも成長した現時点での知識をもって接することで何かしらの情報を得るというプロセスに制限をかけることになる。博物館の資料は当時の人びとからしたら実際に使用していたものであるから、人が手に触れることで最大限情報を発するものであると考える。

こうした来館者が資料を身近に感じることで得られる情報というのは、大きな可能性を秘めている。筆者はこうした来館者に近い展示を進めていくべきと考え、それを成し遂げることが可能なのは野外博物館であるとも考える。

これらのことから、構成主義に基づく展示のこれらの特徴は野外博物館での展示と共通

する点が多いとみなせよう。例えば、昭和初期の日本家屋にきた親子三世を想像してもらいたい。祖父母や親世代は家屋を見て、自身が生活してきた時期を思い出すことで懐かしく思いながら展示を楽しむだろう。または、現状で日本家屋に住んでいる場合は自分の家とは異なっている箇所を探しながらその建造物について会話をしながらより理解を深めるだろう。その時、来館者には自身の経験に基づいた知識でもって、その人自身で能動的に学んでいる状態にある。ここで全ての人と同じ結論にたどり着くことは無いだろう。

一方で、孫世代には日本家屋はあまり縁がなく生活もしてきていないであろうから、あまり現実性に欠けると感じるかもしれない。だが、学校や家庭で読み聞かせてもらった昔話や、教科書、その他日常生活で得られる知識と結びつけて、今の自分が理解できる範囲で最も身近に思える解釈をする。この場合も能動的に学んでいる状態である。

このように考えると、野外博物館での学びは来館者自身の人生経験を活用しない方法をとることが難しいと言える。無論、これは博物館全体に言えることではある。しかし、このことはハインの言う構成主義が目指す展示方法に似通ったものにならざるを得ないと考えられる。稀に屋内に時代室展示として当時の部屋を再現するものもあるが、展示室の中にあるため来館者の経験的知識を引き出しにくいのではないかと考える。これらの関係については今後、調査を行っていきたい。

では反対に、野外博物館でハインの構成主義以外の理論に基づく展示方法を採ってみるとどうであろうか。仮に動線が設定されているとしたら、広大な敷地にある建造物資料を全て何かしらのテーマで連結させることになる。これは来館者が博物館疲労を起しやすくなると考えられ、それ以外にも収集した年代がバラバラの建造物の一つ一つの情報を結び付けること自体が困難なものである。現状

では多くの野外博物館が家屋の種類などでエリア分けを行っていることが多いが、それは見学順を提示するものではない。建造物内にキャプションがあり、その順番は決まっていることもあるが、それは言うなればガラスケースの茶碗や刀剣のキャプションと同様の機能である。この場合の見学順とは、例えば歴史系の博物館で見られるような古代から始まり近代、現代へと抜けていくようなルートのこと、野外博物館に照らし合わせるなら縄文時代の竪穴式住居から明治時代の洋館、昭和の日本家屋といった時代順に並べられているのと同義である。こういった形式の野外博物館が存在しないことから、野外博物館では見学順を設定すること自体が無意味なことと言えるだろう。

5 野外博物館における野外教育の可能性

野外博物館での教育は未だに明確な指標が定まっていないと捉えられる。しかし、現状で分かっていることは、その根底には郷土教育的要素があり、資料として建築物を扱うために建築学的な要素や、野外美術館というものも存在するため美術教育など感性を豊かにするための教育も可能であると言える。

それ以外にも多くの可能性を秘めていると言える野外博物館で、筆者は新たに教育学の分野で用いられる「野外教育」の観点による博物館教育の導入を提唱したい。野外教育とは元々はアメリカ合衆国で1940年頃より“outdoor education”として広まったもので、野外における活動や自然体験、スポーツなどを教材に、人間が自分自身で物事を知り、学びに繋げることを目的としている。

日本では、文部科学省生涯学習局青少年教育課が野外教育を「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」と捉えている。また、この場合の自然体験活動とは「自然の中で、自然を活用して行われる各種活動であり、具体的

には、キャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察といった自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会といった文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動である」としている。このことから、日本では野外教育とは自然教育と同意義と理解されている。しかし、“outdoor”という語から分かるように、本来ならば学校の教室の外側という意味があり、これは必ずしも自然教育である必要はない。ここには博物館での教育も含まれているだろう。野外教育において博物館は、本物の資料に触れることのできる野外教育の格好の場であるとしているが、筆者の調査では野外博物館だけでなく博物館全体として見ても、野外教育を結び付けた研究は現状では見当たらなかった。

国内での野外教育が自然教育と同等に扱われている点は、野外教育と博物館を結びつけることを困難にしている一つの原因であると思われる。自然科学系の博物館での学習プログラムとして植物や鳥類の観察などは野外教育と見なせるだろう。だが、火起こし体験や道具作りなども野外教育であり、これらは人文系の博物館などで行われている例もある。そうなると、野外教育は自然科学系の博物館以外でも実践可能と判断でき、その特性上野外博物館はその格好の場として利用することができると思う。

博物館と野外教育を直接結び付ける研究は見当たらなかったが、博物館との結び付けに援用できるものに東原昌郎の研究がある。東原は野外教育に風土概念の導入を提唱し、日本の伝統文化を育てている自然が形而下のみに限るのは野外教育の発展を閉ざすとした。(東原 1990)そして、和辻哲郎の風土論を参考にして以下のように風土を捉えている。

- (1)「自然」概念を自然科学的観点に偏重させることなく社会・人文科学の対象と

して、さらには科学の枠組みを超え哲学的対象とする

- (2)「風土」概念は自然概念に比して社会・人文科学及び哲学的対象として捉える文脈にある
- (3) 野外教育の目標が自然科学的理解に留まらず個人的社会的な生活とその文化理解をも含むならば、風土概念のほうが自然概念に比べより高い整合性を持つ(土方・張本 2019 p.23)

つまり、「風土」概念は「自然」より生活文化的意味合いが強いため、野外教育における「野外」≒「風土」と考えた方が教育の可能性を最大限実現できるということである。

さらに、土方圭は東原の研究を再解釈し、野外教育を「現代文明から外に出ること(実践的な文脈では多くの場合「自然環境」)により人間の実存性を露わにする教育であり、それらと相互に作用しながら醸成されてきた風土及び風土性へ曝す教育」としている。

また土方は、「風土」とは一般的に「一定の地理的空間における共同社会の人々と生活的自然との一体的関わりの全体」であるとし、「生活的自然とは環境的自然と明確に区別されるもので、身体的人間が関わる対象としての経験的自然のことであり、本質的には人間と共に存在する自然」を指していると言及する。

これらの東原と土方の野外教育における風土概念導入を援用することで、博物館で野外教育を行うことの有効性と妥当性を証明できると考える。本稿で野外博物館としているのは新井の分類における、移設・復元型の文化史を扱う館である。こうしたタイプの野外博物館では資料がその地域の建造物であったり、日本各地の保存価値が認められた建造物などが移築されていることから、狭義であっても広義であっても郷土意識が強く働いている。この点において野外教育における自然を

風土と読み取った場合、野外博物館での野外教育は妥当なものであり、人間の直接体験を重視し、学びのプロセスに焦点を当てる野外教育は野外博物館での学びの可能性を広げるものとなるのではないかと考える。

おわりに

本稿では野外博物館の歴史と国内における研究を整理した。そして野外博物館での教育及び学びの可能性について言及し、野外博物館での野外教育の導入を提言するものであった。野外博物館での構成主義に基づく理論や、野外教育導入については現状では全体を把握できていないため、今後も継続して調査を続けていきたい。

参考・引用文献

- 新井重三 1956「第8章 野外博物館」『博物館学入門』理想社、pp.206-216
- 新井重三 1989「野外博物館総論」『博物館学雑誌』第14巻、第1・2号合併号、全日本博物館学会
- 新井重三 1990「日本の現状からみた博物館の種類と分類」『博物館学雑誌』第15巻、第1号・2号合併号、全日本博物館学会
- 石井正巳 2016『博物館という装置—帝国・植民地・アイデンティティ』勉誠出版
- 伊藤寿朗 1993『市民のなかの博物館』吉川弘文館
- 江水是仁・大原一興 2006「屋外展示民家における興味が異なる来園者の観覧行動に関する研究—温暖期における江戸東京たてももの園・八王子千人同心組頭の家的事例—」『博物館学雑誌』第32巻 第1号、全日本博物館学会
- 大原一興 1999『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会
- 落合知子 2009『野外博物館の研究』雄山閣
- 落合知子 2006「野外博物館小史」『國學院大學博物館学研究室紀要』第30号
- 後藤守一 1931『欧米博物館の施設』pp.2-21、帝室博物館
- 木場一夫 1991「新しい博物館—その機能と教育活動—」『博物館基本文献集』第12巻 pp.192-207、大空社
- 佐々木秀彦 2013『コミュニティ・ミュージアムへ「江戸東京たてももの園」再生の現場から』岩波書店
- ジョージ・E・ハイン著 鷹野光行監訳 2010『博物館で学ぶ』同成社
- 杉本尚次 2000『世界の野外博物館 環境との共生をめざして』学芸出版社
- 杉本尚次 1977「市民のふるさとスカンセン」『季刊民族学』1、千里文化財団
- 杉本尚次 1985「野外博物館の展示—ヨーロッパの事例を中心に」『展示学』2、日本展示会
- 杉本尚次 1978『野外歴史博物館』世界博物館シリーズNo.14、講談社
- 高橋順一 1996『博物館体験 学芸員のための視点』雄山閣
- 高橋雄造 2008『博物館の歴史』法政大学出版局
- 東原昌郎 1990「野外教育における風土概念導入に関する一考察」『東京学芸大学紀要 5部門』第42巻、東京学芸大学、pp.109-115
- 鶴田総一郎 1960「日本の博物館の状況について」『博物館研究』VOL.33-12、日本博物館協会、pp.32-39
- 日本野外教育研究会 2001『野外活動—その考え方と実際—』杏林書院
- 浜口哲一 2000『放課後博物館へようこそ 地域と市民を結ぶ博物館』地人書館
- 土方圭・張本文昭 編著 2019『野外教育学序説』三恵社
- 藤山一雄 1990「新博物館態勢」『博物館基本文献集』第4巻、大空社、pp.1-20
- 星野敏男・川嶋直・平野吉直・佐藤初雄編著 2001『野外教育入門』小学館
- 松宮秀治 2009『ミュージアムの思想』白水社
- 村上義彦 1997『地域博物館概論』雄山閣
- 矢島國雄 1991「野外博物館における民俗文化の保存と教育《スカンセンとプリマス・プランテーション》」『MUSEOLOGIST 明治大学学芸員養成課程年報』6、明治大学学芸員養成課程、pp.24-35
- Alexander, Edward P. 1983 *Museum Masters: Their museums and their influence* American Association for State and Local History, Nashville.

Jerzy Czajkowski, 1985 *10years of the Association of European Open Air Museum*, acta scansenologica 3, Muzeum Budownictwa Ludowego W Sanoku

Hans Falkenberg, 1981 *Development and Specifics of Open Air Museums in the United States of America*, acta scansenologica 2, Muzeum Budownictwa Ludowego W Sanoku

The possibility of learning in the open-air museum: Based on the arrangement of its understanding

OTAKI Takumi

Open-air museums are not clearly defined in Japan, but the name is currently widely used.

The open-air museum is regarded as a cultural history museum dealing with relocated and restored buildings in this article, and its history and development formation are organized.

At the same time, this article presents the possibilities of practice in education and learning at open-air museums and recommends the introduction of “outdoor education”.